

令和元年度

東アジア文化創造 NARA クラス
事業報告書

令和元年 6 月～9 月

奈良市 文化振興課

東アジア文化創造 NARA クラスについて

■ 東アジア文化創造 NARA クラス

「東アジア文化創造 NARA クラス」は、2016 年の東アジア文化都市における日中韓交流事業の成果を未来へと繋いでいくため、大学生や高校生等を対象とした国際文化交流プログラムである。

平成 29 年度から実施しており、奈良市内でさまざまな分野についての学びを深める「東アジア学びの扉」、中韓から大学生や高校生等を招き交流を行う日中韓交流プログラム、さらに現地に渡って学生たちと交流を行う海外渡航プログラムを行っている。

■ 令和元年度プログラムについて

今年度は奈良で活動する詩人や演出家の協力を得て表現の手法を学び、実践するプログラムを行った。言語や文化の違う人たちとのコミュニケーションにおいてヒントになると考え、企画を行った。

東アジア文化都市 2016 奈良市

「東アジア文化都市 2016 奈良市」では、事業の柱となる「基幹事業」、中国・韓国のパートナー都市とともに開催する「交流事業」、奈良の既存のポテンシャルを生かしさまざまな事業と連携し発信する「連携事業」、そして、東アジアの文化をテーマとした「シンポジウム」で構成。

「交流事業」では、パートナー都市である、中国・寧波市、韓国・済州特別自治道とさまざまな分野において文化交流を行った。

東アジア文化創造NARAクラス

国内プログラム

ガイダンス

東アジア学びの扉
(事前の講座・ワークショップ)

奈良での日中韓交流プログラム

成果報告会

渡航プログラム

中国・寧波での交流プログラム

韓国・済州での交流プログラム

目 次

東アジア文化創造 NARA クラス概要	2
国内プログラム	
東アジア学びの扉	4
東アジア文化交流プログラム 2019 “創造する奈良” (8/24、25) に向けての準備	10
東アジア文化交流プログラム 2019 “創造する奈良”	12
海外渡航プログラム	
寧波日中韓青少年交流プログラム	20
韓日中青少年文化キャンプ in 済州道	23
活動の成果	
成果報告会	27
参加者レポート ① 国内プログラムへの参加を通じて	29
参加者レポート ② 寧波渡航プログラムへの参加を通じて	32
参加者レポート ③ 済州渡航プログラムへの参加を通じて	36
令和元年度事業 成果と課題	38

東アジア文化創造NARAクラス概要

プログラムスケジュール

6月16日（日）ならまちセンター

参加者ガイダンス

第1回 学びの扉

講師 新居 達也 氏（ナ・L I V E実行委員会委員長）

7月7日（日）ならまちセンター

第2回 学びの扉

講師 友松 洋之子 氏（Nara観光コンシェルジュ、まほろばソムリエ）

小野 小町 氏（詩人、奈良町にぎわいの家 総合プロデューサー）

高松 明弘 氏（ならまち遊歩 イベント部会長）

7月21日（日）ならまちセンター

第3回 学びの扉

講師 小野 小町 氏（詩人、奈良町にぎわいの家 総合プロデューサー）

8月24日（土）・25日（日）ならまちセンター

東アジア文化交流プログラム2019“創造する奈良”

中国・寧波市、韓国・濟州特別自治道から大学生や高校生が来寧し、交流を深める

講師 新居 達也 氏（ナ・L I V E実行委員会委員長）

小野 小町 氏（詩人、奈良町にぎわいの家 総合プロデューサー）

8月8日（木）～11日（日）中国・寧波市

寧波日中韓青少年交流プログラム

奈良から10人の大学生・高校生が中国での交流プログラムに参加

9月20日（金）～23日（月・祝）韓国・濟州特別自治道

韓日中青少年文化キャンプ in 濟州道

奈良から10人の大学生・高校生が韓国での交流プログラムに参加

9月29日（日）ならまちセンター

東アジア文化創造NARAクラス 成果報告会

参加者応募・選考について

募集期間：平成31年4月19日（金）～令和元年5月20日（月）

○応募者 (人)

結果	高校生	大学生	合計
選考通過	8 (男1女7)	12 (男1女11)	20 (男2女18)
落選・辞退	7 (男1女6)	5 (男1女4)	12 (男2女10)
合計	15 (男2女13)	17 (男2女15)	32 (男4女28)

○参加者 (人)

結果	高校生	大学生	合計
寧波渡航プログラム	2 (男0女2)	8 (男0女8)	10 (男0女10)
濟州渡航プログラム	6 (男1女5)	4 (男1女3)	10 (男2女8)
合計	8 (男1女7)	12 (男1女11)	20 (男2女18)

参加者ガイダンス・グループワーク

日 時：令和元年6月16日（日）10:00～12:00

場 所：ならまちセンター 会議室3・4

内 容：

文化振興課 池田課長より冒頭に挨拶を行った後に、事務局よりプログラムの説明を行った。また、参加者たちに自己紹介をしてもらった。参加者たちは、緊張しながらもプログラムの意気込みを述べていた。



国内プログラム

事業名：第1回 東アジア学びの扉

日 時：令和元年6月16日（日） 13:00～15:00

場 所：ならまちセンター 会議室3・4

講 師：新居 達也 氏（ナ・L I V E実行委員会委員長）

テーマ：演劇で考えるコミュニケーション～通じなくても伝えるために～

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 18人

内 容：

東アジア文化創造 NARA クラス、平成30年度最初のプログラムとして、新居氏による演劇ワークショップを行った。日中韓の交流プログラムに参加するにあたり、身体表現でのコミュニケーション方法を習得してもらうことを目的とした。

講座では、あだ名を覚えるゲームやジェスチャーゲーム、ポスターゲーム（お題のポスターを複数人で身体によって表現）などを行った。言葉に頼らず、動きで自分の意思を伝えたり、相手の気持ちを読み取るワークであった。日中韓交流では、言葉が通じずにコミュニケーションが上手くとれない場面があると考えられる。本ワークショップは、そのような場面において、どう行動すれば言葉以外でのコミュニケーションできるかを考え、実践できる内容であった。

参加者たちは、最初は緊張している様子だったが、様々な身体表現のワークを通して打ち解けているようであった。ゲームであだ名を覚えたり、一つの作品を作り上げるグループワークが参加者同士の距離を縮めることにつながったと考えられる。



<実施後アンケート>

- ・ 身体を使ったワークショップでは、普段やらないようなことをして初対面の人達とコミュニケーションをたくさん取ることができてとても有意義な時間になりました。このような体験は初めてだったので、とても楽しかったです。人前に出て色々やるのがあまり得意ではなかったですが、**やってみるととても楽しくて少し勇気を持ってました。**
- ・ 演劇で表現を学べて良かったです。やっぱり自分には表現力がないし、人見知りもするし、まだまだ足りない部分がたくさんあるなど感じました。班で一緒になった大学生がとても優しくて安心しました。高校生のみんなとも仲良くなりたい。
- ・ 私が想像していた演劇は台本があり照明があり…というものだったが、今回のものは良い意味で違っていた。自分の思いは相手にどうやったら伝わるのか、そして相手はどこが分かっているのか、また、受け手になった時に、相手は何を伝えようとしているのかという**自分だけでなく相手のことも考えてコミュニケーションすることを学んだ。**私はコミュニケーションをする時、言葉に頼りがちだが、今日のプログラムのように自分の表情やジェスチャーでも思いが伝わると学んだため、これらも意識してコミュニケーションを取っていこうと思う。**大切なことは、相手に伝えたい、相手とコミュニケーションしたいという心意気だと感じた。**

事業名：第2回 東アジア学びの扉

日時：7月7日（日） 10:00～15:00

場所：ならまちセンター 会議室3・4

講師：友松 洋之子 氏（Nara 観光コンシェルジュ、まほろばソムリエ）

小野 小町 氏（詩人、奈良町にぎわいの家 総合プロデューサー）

高松 明弘 氏（ならまち遊歩 イベント部会長）

テーマ：奈良の魅力を発見するフィールドワーク、奈良の魅力を深めるワークショップ

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 19人（うち1名午前中で早退）

内容：

第2回は「奈良の魅力を発見するフィールドワーク」と「奈良の魅力を深めるワークショップ」と題し、ならまちのガイドツアーや詩の作成を行った。午前中はならまちの不思議伝説を訪ねることをテーマとして、友松氏にならまちのガイドツアーを行っていただいた。ならまちの各所を巡りながら各所の説明のみならず、ガイドの手法も教えていただいた。また、8月のならまち遊歩で開催される予定であったナイトツアーの内容の紹介もしていただいた。采女神社からスタートし、猿田彦神社、元興寺、元興寺（塔跡）、御霊神社、庚申堂の順で巡った。

午後は小野氏に作詩のワークショップをしていただいた。このワークショップで作った詩は、参加者たちが各々撮ってきた写真とともにスライド形式にまとめ、本プログラムと企画連携を行う予定であった「ならまち遊歩」や、講師である小野氏が総合プロデューサーを務めるにぎわいの家で後日上映された。

まず小野氏に谷川俊太郎や中原中也など、詩の幅広さについて説明していただき、その後事前に参加者たちが撮影してきた写真を一人ずつ紹介した。そして写真を撮影した理由をもとに、詩のヒントを講師からご提示いただいた。参加者は詩に使用する言葉選びに苦戦していたようだったが、小野氏からの「その風景を見て感じたことをそのまま詩にすれば良い」という助言を受けて作品作りに挑んでいる様子であった。時間の関係で、作詩を参加者の宿題とした。

続いて高松氏からは、「ならまち遊歩」について説明いただいた。



<実施後アンケート>

- ・ 今日、自分が撮った写真から詩や短歌を作るワークショップを行った。なかなか上手く作ることはできなかったけど、講師の方からの「自分の思ったままに表現すれば良い」というアドバイスを参考に、何とか詩を完成させることができたので良かった。また、フィールドワークでは僕が知らなかった場所やお話、特に怖い話について聞いて良かった。次回の学びの扉も楽しみです。
- ・ 午前のならまち巡りでは、今まであまり知らなかった様々なエピソードなどを聞くことができ、8月24、25日の交流で活かすことができるのではないかと思います。午後の文章表現のワークショップでは、少し難しかったけど楽しく活動できました。自分の感じたことを表わすことの大変さを学びました。
- ・ ならまちをガイドさんの詳しい説明を聞きながら周れてよく勉強になった。大学のクラブでならまちを巡る企画に何度か携わらせていただいたが、それらと違う視点で面白かった。小野先生の講座については、自分の撮った写真について、改めて考えていくことができ学びにつながられた。他の人が撮った写真についても、どのような視点があるのかや、自分だったらどう詩を作るかなど色々な考えを巡らせることができた。小野先生に、鳥居の写真が詩的だと褒めていただけて良かった。



事業名：第3回 東アジア学びの扉

日時：7月21日（日） 10:00～12:30

場所：音声館 会議室

講師：小野 小町 氏（詩人、奈良町にぎわいの家 総合プロデューサー）

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 19人（うち1名遅刻）

内容：

第3回は、前回のワークショップで作詩したものを朗読する内容であった。はじめに発声練習を行い、朗読を収録する際の声の出し方について講師に教えていただいた。「声だけで感情を表現するためには、声色や高さなどを工夫しないとイケない」という指導があった。その後、一人ずつ自分の作った詩を参加者の前で発表し、その後講師より個別に指導していただいた。参加者は、詩の発表時などに照れくさい表情を浮かべていたが、講師に指導していただくにつれてワークショップにより真剣に取り組んでいる様子であった。

個別指導を受けた参加者は、制作チームで作る動画作品のために別室で収録を行った。参加者は緊張しつつも、指導の成果を発揮すべく、自分の作った詩を詠み上げていた。

なお、第2回、第3回の「学びの扉」ワークショップで参加者が作った詩や朗読した音声は、制作チームの手によって動画に編集される予定であり、参加者にとっては自分たちの表現活動を作品化する過程も学ぶ内容であった。



<実施後アンケート>

- ・ 自分で作った詩を朗読するのはとても緊張しました。声だけで感情を伝えるには、声色、声の高さなどを考えないといけないので、とても難しいことだと分かりました。
- ・ 朗読についての授業を受けてとても勉強になりました。どのように強弱をつけることで相手に伝わるのか、間の取り方などアドバイスをしていただいて、朗読方法を新たに学ぶことができました。新しい奈良の魅力の伝え方を知れたので、今後詩を通して魅力を伝えるという方法も積極的に使っていきたいです。
- ・ 詩の朗読は普段あまり体験しないことだったので少し緊張しましたが、とても楽しく活動することができました。
- ・ 録音などが初めてだったので新しい経験ができて良かった。先生に褒めてもらえて嬉しかった。



東アジア文化交流プログラム 2019 “創造する奈良”（8/24、25）に向けての準備

奈良での日中韓交流に向け、奈良の参加者たちは交流チーム、発信チーム、制作チームに分かれ、全3回であった「学びの扉」の前後の時間においてそれぞれ準備をしてきた。各チームの概要は以下の通りである。

○交流チーム 8人

歓迎セレモニーとフィナーレの進行や、歓迎セレモニーでのアイスブレイキングゲームなどの企画、進行を行った。なお、歓迎セレモニーは英語で行うこととした。準備の時間には、ゲームの内容を話し合ったり、英語での説明を考えた。メンバーは、言葉が通じない状況であっても伝わりやすくなるように、ジェスチャーを多くしたり、分かりやすい表現を使うように工夫していた。



○発信チーム 6人

奈良での日中韓交流1日目の絵付け提灯体験の説明と、「ならまち夜のガイドツアー」の企画を担当した。「宝探しのようなツアーにしたい」という案から、各ポイントの下見を行った上で、ツアーで巡る6つのポイントにメンバー手作りの焼き物のプレゼントを設置した。ガイドツアー時には、各グループのリーダーとなって中韓の参加者たちにならまちを案内した。



○制作チーム 6人

「学びの扉」で参加者が作成した写真と詩による作品をスライドショーにまとめ、映像作品を完成させた。映像編集時には、映像作品の構成などをメンバー同士で話し合った。この映像作品は、本プログラムとの企画連携を行った「ならまち遊歩」や、講師の小野氏が総合プロデューサーを務められているにぎわいの家で上映された。奈良での日中韓交流の時には、2日目のことばの作品作りワークショップにおいて説明や進行を担当した。



ことばの作品「奈良-NARA- 私の心に刻まれた情景」

制作：東アジア文化創造 NARA クラス

短詩指導・朗読指導：小野小町氏

小野氏に短詩指導をいただき、参加者は自作の詩と朗読による映像作品を完成させた。本作品は、奈良での日中韓交流に向けて、参加者が奈良の魅力を発見・発信しようと制作した「ことば」の作品である。作品では、奈良で暮らす若者たちが日常のなかで見出した「奈良」が表現されている。



灰色の瓦に白塗りの壁
桜の花を照らす空は
緑の木々の奥
黒ずむ壁は
私の足元に
その足元に花びらよ来い



ことばの作品「奈良-NARA- 私の心に刻まれた情景」 観覧者数

	ならまちにぎわいの家	ならまち遊歩
上映期間	8月17日～31日	8月17日～18日、24日～25日
観覧者数	2,953人	116人

事業名：東アジア文化交流プログラム 2019 “創造する奈良”

日 時：8月24日（土）25日（日）

場 所：ならまちセンター

講 師：新居 達也 氏（ナ・L I V E実行委員会委員長）

小野 小町 氏（詩人、奈良町にぎわいの家 総合プロデューサー）

参加者：奈良市 24日：18人 25日：19人

寧波市 両日：10人 濟州道 両日：10人

内 容：日中韓参加者による国際文化交流プログラム

<交流1日目／8月24日>

午前：歓迎セレモニー、交流ゲーム（午前中は英語による進行）

ならまちセンター多目的ホールにおいて、中韓参加者26人を大きな拍手で迎えた。最初に奈良参加者のうち、交流チームが準備したアイスブレイクゲームを一つ行い、親睦を深めた。参加者全員が蚊から始まり、じゃんけんに勝ち続けると最終的に人間になれるというゲームだった。

その後、仲川げん奈良市長が到着し、歓迎セレモニーを行った。セレモニーの進行は交流チームが担当した。これから交流を行う日中韓参加者に向けての激励の言葉が、市長より英語で贈られた。各都市参加者代表も2日間の交流への意気込みを英語で述べた。

歓迎セレモニー後、交流チームによる交流ゲームを二つ行った。ジェスチャーだけで誕生日を伝え合い、順番に並ぶバースデーラインゲームや、様々な色のシールを参加者の背中に一枚ずつ貼って、話さずに色別で集まるというゲームを行った。参加者は英語での説明が分からずに戸惑う場面もあったが、ゲームを通して打ち解けている様子であった。



午後：

■ 演劇ワークショップ（講師：新居 達也氏）

第1回東アジア学びの扉でも講師を務めていただいた新居達也氏による日中韓ワークショップを実施した。自分が呼ばれたい名前に二つの動きをつけ、全員でその動きをつなげてダンスのようにする活動や、学びの扉でも経験したポスターゲームなどを行った。また、ポスターゲームでは、シーンを4つ組み合わせて一つのストーリーを作り上げる活動も行った。

動くことが中心のワークショップで、言葉の壁を感じる事が少なく、参加者同士の溝を埋めることができた。特にポスターゲームは第3回東アジア学びの扉においても実施したワークであったが、学びの扉での内容をより発展させ、日中韓のグループで行うことでコミュニケーションが作品として表現されるものであった。



■ 絵付け提灯体験

ならまち遊歩で使われている絵付け用の提灯をご提供いただき、参加者たちは夜のならまちガイドツアーで使用する提灯の絵付けを行った。奈良の参加者の発信チームの2人が絵付け提灯の説明を担当した。日中韓の参加者は6つのグループにわかれ、お互いの作品を見ながらマーカーや和紙の折り紙によって作品を完成させた。



■ ならまち夜のガイドツアー

6つのグループにわかれ、**采女神社や元興寺などを巡るガイドツアー**を行った。このガイドツアーは、奈良市の参加者の発信チームのメンバーが企画、準備したもので、ツアーの前にパワーポイントを用いて、各グループで巡る6箇所の説明を行った。



ガイドツアー各グループの発信チームのメンバーが中心となって6つのポイント（采女神社、率川地蔵尊、元興寺、庚申堂、オリエント館、ならまちセンター）に立ち寄り、参加者たちは**中韓参加者のための「焼き物」のプレゼント**を探していた。皆グループのメンバーと話し合っってルート確認などをし、ガイドツアーに参加していた。ガイドツアーのルートは、第2回の「東アジア学びの扉」の講師であった友松氏に案内していただいたもので、奈良の参加者たちにとって「東アジア学びの扉」で学んだことを実践する機会となった。

ガイドツアー終了後にならまちセンターのロビーで集合し、各グループの代表者が感想を述べた。中国語の詩を引用して感想を発表した参加者もいた。通訳を介して感想を全体で共有し、最後に主催者を代表して池田課長から挨拶を行った。



<交流 2 日目／8 月 25 日>

午前：ことばの作品制作ワークショップ（講師：小野小町氏〔13 時～〕）

この日は一日、ことばの作品のグループワークを行った。このグループワークの企画や進行は、奈良の参加者の制作チームのメンバーによって行われた。各々の参加者が撮ってきた写真を基に詩を作り、その詩と楽器演奏を写真に合わせて朗読を行うという内容で、奈良の参加者が作ったことばの作品を今度は中韓の人たちと作り、披露するものであった。

午後からは第 2 回、第 3 回の学びの扉でもお世話になった小野氏に来ていただき、作品制作時には参加者たちにアドバイスいただくとともに、作品発表時には各グループの作品の講評いただいた。

ワークショップ冒頭に奈良の参加者（制作チームのメンバー）によるワークショップの説明を行い、グループワークに移った。グループワークでは、各々が撮ってきた写真についての説明や、写真に合う単語やフレーズを考えた。なお、言葉は日中韓いずれの言語でも可とし、参加者は英語や翻訳アプリを使用してコミュニケーションをとっていた。

ここまでの過程を終え、写真の順番を決定した後に、事務局が用意したトーンチャイムや鈴などを使用して作品用の BGM を練習した。BGM の演奏や言葉の朗読の担当などを同時に決定し、別室でグループごとにリハーサルを行うことで発表の準備を整えた。



午後：

■ 作品発表（講師：小野 小町氏）

各グループ 5 分程度で作品を発表した。小野氏に、それぞれの発表に講評を加えていただいた。交差点に十字の形の道路標示がある写真を選び、「人生の交差点」と表現したグループがあった。小野氏はこれに対して「何気ない日常の風景を生き方に落とし込めるその思考力、表現力は素晴らしい」とコメントされた。また、楽器による音の演出が効果的だと評価される場面もあった。

参加者たちは演出を工夫し、作品に込めたメッセージを大事にしながら発表に挑んでいる様子であった。小野氏より「言葉一つにしても、言語が異なるだけで響きが全く異なる。その違いを意識して作品を作ってほしい」と助言があったこともあり、グループによっては

言葉の違いを活用して作品を完成させられていた様子だった。



■ フィナーレ

2日間のプログラムを締めくくるフィナーレでは、まず日中韓の参加者代表から感想を話してもらった。その後、奈良市市民部の深村部長から主催者挨拶を行い、寧波市引率代表のシャ シセイ氏、濟州道引率代表のハン スンウ氏にご挨拶いただいた。

最後に奈良の参加者からのプレゼントを中韓の参加者たちに贈呈した。中韓の参加者たちは、ならまちセンター前から出発し、奈良の参加者による見送りが行われた。参加者たちは別れを惜しみ、最後まで抱き合ったり写真を撮ったりしていた。



<実施後アンケート>

[奈良参加者]

- ・ 待ちに待った東アジア文化交流2019“創造する奈良”が始まった。司会であり、歓迎する側だったためとても緊張していた。しかし最初のゲームからみんなの笑顔を見ることができてよかった。距離を一気に縮められたことでその後のプログラムも楽しんで進められたし、事前準備から奈良のメンバーと協力して進められたことで更に絆が深まった。**ただ楽しむだけでなく、相手の国の文化を理解し、お互いを知ろうとする姿勢から、現在の日中韓の関係を改善するためには、まず相手の考えや自分と違う意見を持つ人を理解し、寄り添おうと思う心が大切であると思った。**私たちのような、学生同士が国際交流、異文化交流にもっと積極的に参加することで国際的に“平和”を創ることができると思う。この交流が参加者である私たちのスタート地点であり、この経験を多くの人に伝え、また、これからの活動につなげていくべきだ。
- ・ たくさんの日中韓参加者のみんなと仲良くなれて本当に嬉しかったです。連絡を取り合うことができる友達もできました。私は常に消極的でしたがこの交流で**積極性が大切だ**ということも感じました。この経験を生かしてこれからもたくさんの外国人と交流し、世界に通用する人になりたいと思います。
- ・ 話す言葉が違って、身振り手振りで相手に伝えようとする気持ち、そして相手を理解しようという思いがあれば、**言葉を超えてコミュニケーションをとることができるのだと感じた。**

[寧波参加者]

- ・ 学校で勉強している日本語をたくさん喋ることができて、本当にいい勉強になった。日本と韓国の学生と一緒にゲームをしたり、夜のガイドツアーに参加したり、PPTを作成したりして、面白かった。コミュニケーションを取ることは非常に大切だが、今回のプログラムを通じて、この能力を高めることができたと思っている。また、日本のマナーなどについても、ちゃんと理解した。日本人の良いところもよく分かった。**今回の交流活動は絶対忘れられないと思う。**
- ・ 今回の経験を活かして、勇気を出して外国の若者と交流したいと思っている。**自信を持って、将来もっと自分の個性を活かせる仕事がしたいと思うようになった。**本当にありがとうございました。
- ・ 今回の経験を通じて**外国人の前で自信を持って交流することが大事だ**と思った。苦手意

識を持たず仲良くなれると思った。また外国語を学びもっと多くの人と話したいと思った。

[濟州参加者]

- ・ 時局が時局だけにニュースや新聞の情報から三国の関係が緊張状態にあると思っていました。それで空港に着いた時から非常に緊張し、怖かったです。でも**交流が始まった瞬間、すべて私の思い過ごしだった**と思いました。日中韓の学生が集まってにこやかに過ごしたことに大きな感動を受けました。**交流する中で私が持っていた偏見は消え、お互いを尊重し、同等に接することができることをありがたい**と思いました。故郷を離れ、見知らぬ土地で多様な文化を知り、大切なことを学べたことが良かったです。
- ・ 初めての日本に来られたこと、たくさんの友達ができることが一番良かった。日中韓の学生が集まり、お互いを知っていく過程で言葉の壁を越えて交流できたことが良かった。忘れられない思い出を刻むことができ、また**自分自身も知らなかった私の内面を知ることができて良かった**。
- ・ 今回の活動を通じて他国の友達と交流し、お互いを理解することを学んだ。この経験を活かして9月の濟州キャンプではさらに円滑な交流をしようと思う。私の進路とも結び付けていきたい。**外国の友達と言葉の壁を越えて付き合うことができることを周囲の人たちに伝えたい**。

海外渡航プログラム

事業名：寧波日中韓青少年交流プログラム（中国・寧波）

日 時： 8月8日（木）～11日（日）

場 所：中国・寧波市 各所

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 10人（引率2人、添乗員1人、通訳1人）

内 容：

1日目 8月8日（木） （時間は全て現地時間）

中国・寧波での交流プログラムは3泊4日の行程で、交流日は2日であった（成果発表会は3日目に実施）。プログラムのテーマは**写真**であり、参加者が5つのグループに分かれ、それぞれ寧波の街の写真を撮って最後に発表を行うというものであった。

14時頃関西国際空港を出発し、15時半頃に杭州蕭山国際空港到着した。空港にて寧波市職業技術教育中心学校の陸先生と生徒3人に出迎えられ、バスにて寧波へ向かった。

南苑飯店にチェックイン後、18:45から歓迎夕食会を行った。池田課長が奈良市代表者として挨拶をした。

20:30頃からのオリエンテーションでは、三都市がそれぞれ都市紹介を行った。グループ分けの後、交流ゲームを行った。その後、デジタルカメラの使い方と写真の撮り方についてグループミーティングを行い、22:30頃に解散した。

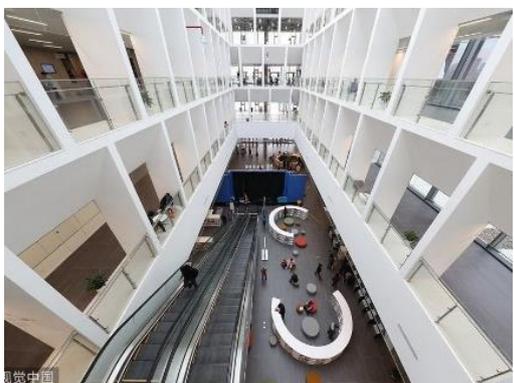


2日目 8月9日(金)

台風9号が近づいているため、大幅な予定変更があった。

交流1日目の午前中は寧波博物館を見学し、グループで写真撮影をした。館内には歴史や芸術をメインに展示してあり、地域の特色も盛り込んでいる。3階建ての建物には、各階ごとにテーマが分かれ、時代ごとに歴史がわかるよう人形やジオラマを展示していた。また日本との関係も深く、貿易港としての歴史的な繋がりも詳しく展示されていた。

午後は天一閣という中国最古の私家蔵書楼を見学し、グループで写真撮影をした。夕方には寧波市図書館新館を見学し、写真撮影を行った。寧波市図書館新館は2018年12月に開館された。地上4階、地下1階からなり、総建築面積31,866平方メートル、蔵書量約150万冊、電子書籍350万種類、閲覧座席数1,800席ある。参加者は、各々の視点からあらゆる場所や人を撮影し、作品作りに励んでいる様子であった。



3日目 8月10日(土)

台風9号の上陸が近づいているため、一日ホテルで交流を行った。午前中は各グループがホテルの部屋でミーティングを行った。前日撮った写真の中から1人2枚選んで、発表用のPPTを作成した。午後各グループでホテルの部屋でミーティングを続けて行い、PPTのテーマや発表内容を考えたりしていた。発表時の役割を決めて、リハーサルを行った。



4日目 8月11日(日)

朝からホテルの会議室にて成果発表会を行った。グループごとの発表で、5グループに分かれた参加者が、それぞれの形で発表した。奈良の参加者も一部は発表者として登壇し、グループで撮影した写真を紹介した。発表会の後に昼食を済ませてから空港へ向かい、21時に関西国際空港で解散した。



事業名：韓日中青少年文化キャンプ in 済州道（韓国・済州）

日 時： 9月20日（金）～23日（月・祝）

場 所：韓国・済州特別自治道 ホテル

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 10人（引率2人、添乗員1人、通訳2人）

内 容：

1日目 9月20日（金）（現地と日本との時差は無し）

韓日中青少年文化キャンプ in 済州道では、**環境問題**をテーマに、写真撮影・現像や楽器演奏などの活動が2日間行われた。

13時頃に関西国際空港を出発し、15時頃に済州国際空港に到着した。空港にて済州道庁文化政策課のハン スノウ氏に出迎えられ、バスにてホテルへ向かった。16時に THE ARTSTAY 済州咸徳にチェックインし、17:30から歓迎セレモニーを行った。歓迎セレモニーでは、参加者紹介や領事館などから来られていたの方々による挨拶があった。

その後、18:00頃から済州、寧波、奈良の参加者がそれぞれダンスや歌などの出し物を行った。（奈良市：参加者全員でダンスと歌を披露）

18:30頃から歓迎夕食会を行い、19:30頃からはプログラム説明、注意事項の紹介があった。

19:50頃からは、済州の参加者による講座「世界市民教育」が行われ、ゴミ問題について学んだ。

20:20頃からはグループ分け、自己紹介を行い、その後秘密友達（マニト）を決めた。マニトとは、各々の参加者に他の参加者の中から、密かに相手の仕事を手伝ったりする秘密友達のことである。参加者たちはすぐに打ち解け、ゲームをして盛り上がっているグループも存在した。

21:50頃にホテルで解散した。



2日目 9月21日（土）

韓国・済州特別自治道での交流プログラムは3泊4日の行程で、交流日は2日であった。

台風17号が近づいているため、予定変更があった。

午前中に現代美術館を見学した。日中韓のグループに分かれ、海洋ゴミを使った作品の展覧会を鑑賞した。外国から漂流したゴミの展示や、ゴミを再利用した作品があった。作品にはそれぞれの作者の「これ以上ゴミを増やさないように」といったメッセージが込められていた。



昼からはダンスのワークショップを行った。「人間を捨てるダンス」と題され、楽器の音に合わせて体を動かしたり、ビニール袋を手にひらに乗せて落ちないようにバランスをとったり、風船を持った人の動きに合わせて身体表現をする内容だった。また、複数人と絡み合いながらも身体接触してはいけないという「コミュニティダンス」も体験した。

夜は、各グループに渡されていたカメラで撮った白黒写真の現像をグループごとに行った。環境に配慮し、現像液はコーヒーやビタミンCなどから作られていた。参加者によっては手探りでフィルムを扱う等、慣れない作業を難しく感じている様子だった。フィルムを吊るし、乾燥させた時点で活動は終了した。



3日目 9月22日(日)

台風17号が近づいているため、予定変更があった。朝から交流ゲームを行い、二人三脚や風船割りなどのグループ対抗リレー形式のゲームで盛り上がった。

昼からは、ダンスのワークショップを行った。リラックスし、身体を動かしながら「平和とは何か」や「なぜ青少年交流をするのか」をそれぞれ考える内容であった。

その後、地球の模型作りや花の絵を描く活動を行った。参加者は木を組み合わせて地球の模型の骨格を作成した。その上から済州の従事者が青色のビニールを貼りあわせて模型を完成させた。花の絵を描く作業では、参加者たちが各々の国の花や好きな花を大きな模造紙に描いていた。自分の手のひらの形を花びらに見立てて花を描いている参加者もいた。



15時過ぎからは夜の作品発表会に向け、音楽チームとダンスチームに分かれて練習を行った。音楽チームは海洋ゴミで作られた楽器の演奏を練習し、ダンスチームは K-pop のダンスを練習した。

夜は作品発表会を行った。各都市参加者代表挨拶や、初日に決めた「マニト」(各々の参加者に他の参加者の中から、密かに相手の仕事を手伝ったりする秘密友達のこと)の発表をした。参加者は自分の秘密友達と一緒に記念撮影をしたり、プレゼントを渡し合うなどして親睦を深めていた。

その後、参加者が撮った写真の紹介や記録映像の紹介を行い、最後にダンスと楽器演奏を披露し合った。作品発表では、演奏のアンコールがかかったり、ダンス発表の最後に参加者全員で踊るなど、非常に盛り上がっていた。



4日目 9月23日(月・祝)

9:30 にホテルを出発し、10:10 頃から済州牧官衙（朝鮮時代の役所跡）と地下商店街、東門市場を見学した。



昼食をとった後、13時過ぎからイーマート（ショッピングセンター）で買い物をし、済州国際空港に向かった。19:30 に関西国際空港で解散した。



活動の成果

事業名：東アジア文化創造NARAクラス 成果報告会

日 時：令和元年9月29日（日）15:30～17:20

場 所：ならまちセンター 会議室3・4

出席者：18人

内 容：

最初にパワーポイントを用いてNARAクラス全プログラムの振り返りを行い、グループワークを行った。グループワークでは、それぞれの都市でのプログラム内容を参加者同士で報告し合った。参加者たちは、時間を目一杯使って積極的に他の参加者に活動内容を報告し合っていた。

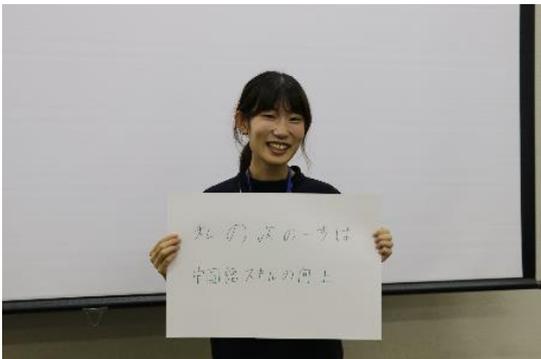
その後、寧波、濟州からいただいた海外プログラムの記録動画を上映した。

記録動画鑑賞後は、初回のプログラム時に参加者に書いてもらったアンケートのコピーを本人に配布し、「自分の表現力に自信はあるか」や「奈良のことを海外の人に紹介することに自信はあるか」といった項目において、プログラムを通しての自身の変化を意識しながらアンケート記入をしてもらった。

最後のワークとして、プログラム参加で自分が得たことや学んだことについて考えてもらい、その学びを今後どう活かしていくのかを画用紙を用いて一人ずつ30秒～1分程度で発表してもらった。参加者たちは、最初は「恥ずかしい」と戸惑っていたが、各々の自分の思いを発表していた。「このプログラムで積極的に行動する大切さを学んだから、これから多くのことに挑戦していきたい」という発表や「今回得た国際理解の視点を持って将来教師になりたい」といった発表があった。

文化振興課 池田課長より最後に挨拶を行った。その後記念撮影をし、18時から開催予定であった奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良 2019-2020」で実施するグリーン・マウンテン・カレッジの案内後に解散した。

グリーン・マウンテン・カレッジは、たき火とティピーテントのもとに集まり対話することで共有空間を獲得するイベントである。学び合いにより獲得したものを次世代へ伝えていくことを目的に、毎回テーマを変え各分野の専門家をゲストに招き、参加者を巻き込み対話を繰り広げる「学び合いの場」を創出する。



参加者レポート ①国内プログラムへの参加を通じて

■ Mさん（高校2年生）

□学びの扉で学んだこと、感じたこと□

奈良を中国韓国の人たちに紹介するのに奈良の魅力や歴史だけを学ぶのではなくて、伝え方や言葉などの表現力を学んだり感性を豊かにしたりと知識だけではなくて技術も学ぶことができました。また、奈良に住んでいる私も知らなかったならまち周辺の伝説などをたくさん知れたのが学びの扉の中で一番楽しかったです。写真などで見るのではなくて直接そこへ行って実際のものを見ることができたおかげでとても理解を深めることが出来ました。

□日中韓交流で学んだこと、感じたこと□

韓国人や中国人の高校生たちと話してとてもたくさん学んだことがあります。日本で流れる韓国に関するニュースは政治ではとても仲が悪いので、反日や日本製品の不買運動など、印象操作かと思うくらい悪いニュースしか放送されません。そのせいで、世間では韓国や韓国人に対する印象はとても悪くなっていますが、今回韓国人の高校生たちと交流してやっぱり私みたいな韓国好きもいれば日本好きがたくさんいてくれるということをとてもうれしく思いました。あと、世論をそのまま信じずに**自分の意見を持つことが大事だと思いました**。また、中国人の高校生とはお互いにお互いの言語がうまく話せなかったのも、英語や通訳さんを介してコミュニケーションを取っていました。しかし、自分たちで上手く意思疎通が出来なくて外国人同士が会話することの難しさを知りました。そして、私は特に韓国人の高校生たちとよく喋っていたのですが、2日間一緒にいて小さなところで文化の違いを体感しました。

□プログラムでの経験を今後どのように活かすか□

今回、中国韓国の人たちと交流して、「日中韓交流で学んだこと、感じたこと」にも書きましたが、世論をそのまま信じずに自分の意見を持つべきだと思っています。私が今回持った私の意見を大事にして、中国韓国に関する世論以外にもいろんなことに目を向けて考えていこうと思います。また、今回知り合った中国韓国の人たちと連絡を取り合って政治では仲が悪くても、人同士では仲を深めていこうと思います。

■ Kさん（大学2年生）

私は本プログラムに参加するまで国際交流や海外渡航の経験が無く、その経験を補完でき、且つ東アジアの文化に触れられるということに惹かれたため本プログラムに参加した。大学で学校教育や社会科を学ぶ私にとって本プログラムは意義深いものとなった。この視点を交えて振り返りを行いたい。

学びの扉について、全3回を通して「表現」「伝える」ということが主題であった。新居先生のワークショップでは言葉に頼らない身体表現を、対して小野先生のワークショップでは言葉をより効果的に使う表現方法を学んだ。**言葉を使わない表現は難しいながらも自身にできることの幅が広がったような気がした。**そして、言葉の持つ影響力を改めて感じる事ができた。

「教師は役者であれ」という言葉がある。教壇では必ず言葉を使って生徒に伝えるが、より効果的に授業をするためには的確な言葉と、言葉を補完し言葉と同等以上の力を持つ表現が求められる。今回の学びはその力を伸ばす契機や方法を与えてくれた。

また、制作チームとして小野先生のワークショップを基に、参加者の撮った写真や朗読を使った奈良の良さを紹介する動画を作った。私は動画編集に携わり、写真や短詩、朗読、BGMをより良く魅せる工夫をした。完成した作品は、ならまち遊歩や奈良町賑わいの家で放映された。参加者の作品を合わせて1つの作品にする活動から表現の個性について考えることができ、私の技術面での成長や、作品を見てもらう喜びを感じた。

日中韓交流では言語の壁にぶつかることがあった。私の班では共通言語として英語を用いたが、私は英語が苦手で、身振りが伝わらないこともあり、翻訳アプリに頼る場面もあった。しかし、それでも感じたことは、**言語が通じなくても、思いはしっかり伝わるということだ。相手を理解できるか否かではなく、相手を理解したいという気持ちがそうさせるのだろう。**参加者の間にできた友情がその証である。参加者との会話を通して、中韓の文化やその差異についても知ることができた。実際にその国の人に話を聞くことで、調べるだけでは得難い内容さえ理解できるようになる。文化や文化史に興味がある私にとって興味深い時間であった。

今や学校に外国人が在籍することは珍しいことではなく、私が教員としてクラスを持ったとして外国人がいることは想定されることだ。日本人と異なる文化を理解しなければ、授業やクラス運営はできないだろう。2日間の交流ではあったが、今回だけで様々な学びが得られた。この学びは必ず将来に繋がるだろう。また、将来のために知らなければならないことがまだあると痛感する契機にもなった。

現在、悪化の一途を辿る日韓関係や日中関係において、そもそも交流ができるのか私は密かに不安があった。しかし、いざ交流を行うと参加者同士の間には（意識的か無意識か問題に触れることは避けていたのかもしれないが）そのような問題など無く交流ができ、お互いに相手の国が大好きだということが非常に嬉しかった。若い世代がこのような交流を行うことはあらゆる点において必要なことで、参加できて本当に良かったと感じる。

■ Yさん（大学1年生）

私は今回、2日間の日中韓交流と事前に行われた3回の東アジア学びの扉を通して学べたことが、大きくわけて2つある。第1に人と人とのコミュニケーション手段は言葉だけではないこと、第2に民間の交流の大切さである。

1つ目の人と人とのコミュニケーションについてだが、私たちは日本人メンバーと初めて顔合わせをした時と中韓の子たちが日本に来て交流を始める時に、アイスブレイクのようなものとして、演劇に関するワークショップを行った。自分のニックネームに動きをつけてより早くみんなの名前を覚えたり、グループごとに出されたお題の静止画を作るなど、言葉以外のジェスチャーや顔の表情を使って、相手に自分の気持ちや物事を伝えられることが実際の体験を通してよくわかった。また、言葉を使ってコミュニケーションもとったのだが、その時は世界共通語である英語を使う場合がほとんどなので、やはり英語が話せることはこれからの時代に不可欠なのだと痛感した。

2つ目の民間の交流の大切さについてだが、今回の奈良でのプログラム前、私は韓国の子たちは日本に来れるのか正直心配であった。日韓の政府同士の対立は現在かなりひどくなっており、もし来れたとしても韓国の子と良いコミュニケーションがとれるのかわからなかった。だが、実際に韓国の子が日本に来て会話をしたとき、私たちの間で壁ができた対立することはなかったし、日韓の問題について話をしても空気は良いままだった。国同士のことが民間の間に関係に全く影響しないのが良いことなのか悪いことなのかはわからないけど、今回に関してはそのことをお互い気にしない関係が自分的にはとても良かった。今回のように私たちみたいな学生が民間の関係をたくさん築いていって、国同士の関係をもっと良く変えられたら素晴らしいと思う。もっとたくさん自分と同じ世代の子とつながりを作りたいと感じる。

この国内プログラムを通して、奈良の魅力をたくさん中韓の子たちに伝えられて、逆に私自身も初めて発見する奈良がたくさんあり、このことをもっと世界に発信できたら良いと感じた。日本の文化も含め、もっと世界の文化を学びたいと思う。

■ Oさん（高校2年生）

私は中国でのプログラムの中でたくさんの気づきや学びがありました。私自身は初めての海外で、楽しみな気持ちでいっぱいでした。出発までまだまだ時間があるなと思っていましたが、あっという間に出発の日が来てしまいました。

関空に着いてから離陸までの時間も、長いようで一瞬でした。離陸してから杭州空港に着陸するまでも本当に一瞬で、きっと気づいたら関空に帰ってきてるんだろうなと、始まったら終わりが近づいていることを実感して、少し寂しい気持ちになったことを覚えています。

空港に着くと、向こうの方々がカメラ数台で私たちを撮影しながら迎えて下さいました。カメラの多さに、密かに芸能人気分を味わっていました。

空港からバスに約2時間乗ってホテルに移動しました。ホテルに着いたら、すぐに歓迎夕食会がありました。夕食会の会場に入り、横断幕に日中韓それぞれの言葉で書かれた文字を見て私は今、素晴らしいプログラムに参加させて頂いているんだと実感しました。それぞれの国の代表挨拶が終わり、夕食が始まりました。料理も種類がすごく多くて、全てを食べることは出来ませんでした。とても美味しかったです。食べ物ひとつひとつに、中国の文化を感じました。

夕食会の後に交流会があって、それぞれの都市紹介や交流ゲームをしました。その時に初めて言葉が通じないことに苦戦しました。ただ協力すればクリア出来る簡単なゲームでも、言葉が違うだけで、難易度がすごく上がりました。知っている英語を何とか繋げながら話しました。でも、クリアした時の喜びは、みんなで共有出来ました。その後に日中韓ごちゃ混ぜで6～7人ずつでグループを組みました。そのグループで、翌日以降の撮影活動に取り組みました。

2日目は、台風9号の影響で大雨でした。雨の中計画が変更になって、まず寧波博物館、次に天一閣、最後に寧波図書館へ行きました。

他にも回る予定でしたが、台風の影響で予定が変わり、残念でした。しかし中国という国を文化から感じた一日でした。

3日目は、台風の影響でホテルから出ることが出来ず、ずっとホテルでグループのみんなと、2日目に撮った写真を使って発表用のPPTを作りました。ここでも言葉の壁がありました。発表の原稿を作る時がとても大変で、アプリを使い中国語や韓国語に直すと変な日本語になってしまうことがありました。なので、言いたいことを英語で伝えて、それを各国の言語に変える作業をしました。

4日目は、作ったPPTの発表でした。グループの発表も上手くいきました。他のグループの発表を聞いて、それぞれの視点から見た中国の文化を、身を持って感じる事が出来ました。一連のことが終わって、お別れの時が来た時には、とても寂しくて、涙が出そうになるくらい、辛かったです。でもまた絶対に会いに行く！そう決めた瞬間でした。

今、日韓の間で壁が出来つつありますが、私たちの間には一切壁なんて存在しませんでした。これからのアジアの発展にはこの3カ国が中心とも言われている時代に、私たちがこういった交流を持つことはすごく意味のある事だと感じています。

私の将来の夢は通訳になることです。そして今回もうひとつの目標が出来ました。それはこのプログラムに通訳として参加することです。

このプログラムに無事に参加出来たのも、奈良市の文化振興課の皆さん、そして家族のおかげです。感謝の気持ちを忘れることなく、これから自分が出来ることは何なのかを考えて、行動できる人になりたいです。

ありがとうございました。

■ Nさん（大学3年生）

1. はじめに

私は、今回のプログラムで初めて中国を訪れた。今まではメディア等を通して中国という国を知っていたが、今回のプログラムで、自分の目で見て感じ、真の中国の姿を知ることが出来た。これらの体験を、中国で4日間に渡って行った交流を振り返りながら述べていきたいと思う。

2. 日中韓交流について

私は、今まで外国人と話す機会がほとんど無かった。だから、日中韓交流をすると知った時は不安しかなかった。中国語を履修していたといえども、日常会話レベルには到底追いつかない。韓国語に関しては全く勉強したことがない。今まで生きてきて、初めて言葉の壁にぶつかった瞬間だった。なんとか英語で会話することが出来たが、大学では一切英語の授業の無い私にとっては難しかった。この時、一番問題だったのは、ただ会話をするだけでなく、写真撮影を行って、それらを発表資料として作り上げ、全員の前で発表しなければならないということだった。初日、メンバーと顔合わせをした際、本当に自分たちは目標にたどり着けるのか半信半疑であった。それぞれの、言葉という大きな武器を見つけられないという思いは皆同じであったように思う。それでも何とか最後には発表までたどり着くことが出来た。これは、**メンバーのお互いを理解しようとする思いが、行動、姿勢に表れた結果だと感じている**。客観的に見れば、小さなことのように見えるかもしれない。しかし、私達にとっては、何にも代えがたい、大きなものを手に入れることが出来た。これは、私達メンバー全員にとって、言葉の壁を少しだが超えることが出来たという点では、これから生きる上で大きな自信につながることだろう。多くの体験をすることが出来た。

3. おわりに

私は、今まで強い意志をもって行動したことが無かった。教師になりたいと思い、今の大学に入ったが、どこか違和感を覚えていた。自分の学びたいことを学ぶ環境がある。それは本当に幸せなことだと思う。しかし、3回生になり、将来のことを考える上で、もっと多くのことを知りたいと考えた。自分のなりたい教師像を考えた時、外の世界を知っている人でありたいと思った。このプログラムに参加して、真の中国を知れたように思う。参加する前は、中国は少し危険な国というイメージが強かった。中国人と交流できるか不安だった。しかし、予想とは異なり、彼女たちは積極的に言葉を理解しようとする姿勢を示してくれた。この時、私は自分の無知を恥じた。情報にとらわれずに、何事も自分の目で確かめるべきだと感じた。

中国への渡航を終えた今、私は、参加して良かったと心から感じている。まだまだ自分の知らないことがある。大学3回生の20歳という時期にこうしたことを知れて良かった

た。私は、強い意志をもった人間になりたい。その為には、自分の知らないことを自覚し、何事も挑戦し続けることが大切だと感じた。

■ Kさん（大学2年生）

以前は韓国のことにあまり詳しくなかったですが、今回濟州でダンスや芸術の体験を通じ、初めて韓国文化に触れるようになりました。私は、ずっと奈良のような静かな町に住んでいたため、初めて韓国の学生のにぎやかな雰囲気を感じることができ、楽しかったです。「世界の中には、こういう暮らし方もあるんだ」、「こういうふうに暮らしている人もいるんだ」と知り、新たな世界観に触れ、とても新鮮で面白かったと思います。

この5日間で、日中韓3か国の学生は海洋ゴミで作った楽器の演奏や、撮影、絵画、ダンスなどを一緒に練習して披露しました。そして、グループワークで自ら環境に優しい方法で白黒写真を現像しました。また、濟州美術館で見学し、自国のごみは海と共に、濟州に入り込むことに驚き、環境を何とかして改善したい気持ちが強くなりました。濟州美術館ではごみを芸術品にし、展示されていて、多くの人に環境を守るということを提唱していることがわかりました。さらに、年何回に濟州で開催される「ごみを芸術品へ」の展示会に参加する海外の人々がたくさんいると聞きました。そのため、私は、濟州の住民や世界の人々が世界のごみを減らして再利用し、力を入れて環境を守るということに感動しました。

このような大規模の国際交流活動に参加したのは初めてでした。私は積極的にこのプログラムで活動し、様々な人と話しができ、自分も非常に満足しました。**この過程の中で、3か国の学生は言葉や行動から文化の違いを感じ、お互いにコミュニケーションをとりながら、異文化に対する理解を深め、非常に有意義だと思いました。**また、通訳者先生たちと話してもでき、言葉の魅力も感じました。これからもいろいろな言葉で世界の人々に感動を伝えていきたいと思っています。

最後の成果報告会では、みんなが自分の「次の一歩」を立て、今回の経験に基づいてこれからどのように行動をするかを考えました。今回の活動から私たちはすべて成長したということを感じました。例えば、このきっかけで将来国際交流事業の仕事を務める人もいます。**私自身は、これからも国際的な視野を持ちながら、目標に基づいて頑張りたいと思っています。**

■ Hさん（高校2年生）

マスメディアが報じる日韓関係のニュースに翻弄され、不安な気持ちと楽しみな気持ちを抱きながら、僕たちは、韓国の済州に向かい、4日間滞在した。僕は、韓国に行くのが初めてで、ずっと前から行きたいと思っていたし、何より環境に配慮している済州の地域で、日中韓の3ヶ国の学生が、共に学びを深められる魅力的なプログラムだと思い、希望した。

参加した感想として、多くの学生と交流でき、とてもいい思い出になったほか、「環境」に関連した問題について、3ヶ国の学生と共に深く向き合うことができたと思う。1日目は、済州の学生の温かいおもてなしのおかげで、自分の不安や緊張が一気に溶けた。そして、8月に日本に来てくれた済州の学生と再会することができ、とても嬉しかった。3ヶ国の学生による心躍るような出し物の後、これから活動を共にするグループ分けが行われた。僕のグループは、韓国の方が4名、中国の方が1名そして日本からは僕一人の計6名で構成された。始めは、言葉の壁を感じて、とても当惑したけど、メンバーの人達が、積極的に話しかけてくれて、とても嬉しかったし、何より短時間でグループのメンバー全員と仲良くなることができた。2日目、3日目は、環境についての学び、「Culture night」を行った。環境についての学びでは、特に「海洋ゴミ」について学びを深めた。済州では、今世界的に問題となっている海洋プラスチックやその他多くのゴミを、なくすために多くの努力、活動を実践していることが分かった。特に、済州文化公園では、海洋ゴミを使った多くの芸術作品が作られていた。また、「ある国の海洋ゴミは、別の国に流れ着く」という言葉がとても印象に残り、こういった問題を減らすためには、各国が努力を積み重ねていく必要があると思った。この企画では、フィルムカメラで撮った写真を環境に優しい形で、現像することを行った。従来の現像方法では、高濃度の危険なインクを使うため、環境に悪影響であるが、今回はコーヒーや水といったものを使い、実際に現像することができ、驚きを隠せなかった。また、3日目には、グループごとに絵をかき、最終的に地球の形を作るというアクティビティーを行った。僕たちのグループは、済州で有名なお花を手で書き、絵を作り上げた。最終的に、みんなの絵をつなげて出来上がった地球は、とても明るく、自然にあふれていた。僕は、この地球の模型を見て、思ったことがある。人類が、個々の活動のために生み出してしまった数々の環境問題を、協力して解決し、みんなが環境を大切に思う地球を作り上げたいと思った。そのために、今回学んだ多くのことを、僕の家族や友達に、伝えていくことから始めていきたいと思う。「Culture night」では、ダンスチームに所属し、K-popのダンスを踊った。僕は、ダンスを習ったことがなく、技術やスキルなどは、ないが、とにかく明るく、楽しんで踊るということを掲げ、みんなで楽しくやることができた。

今回のプログラムでは、自分にとって多くの仲間を作ることができたり、ダンスや閉会式の代表スピーチなどに挑戦したりと、自分にとってとてもいい経験、刺激となった。また、環境問題について学び、改めて今後考えていかなければならないと思った。

令和元年度事業 成果と課題について

<成果>

- 本プログラムは日中韓の文化の力による平和構築をめざした「東アジア文化都市 2016 奈良市」事業を契機として始まったものである。参加者が直接中国や韓国の学生と触れ合うことで、それまで抱いていた先入観や偏見を見直すきっかけとなったことを見て取ることができた。
- 「東アジア学びの扉」においては、日中韓交流でワークショップを行う講師による事前講座的な位置づけであり、プログラムの趣旨や目的を参加者により深く理解してもらえものとなった。特にワークショップ形式で実際に身体を動かすことを取り入れたため、参加者は積極的に学ぶことができた。
- 今年は参加者を 3 つのチームに分け、奈良での交流に向けて準備を進めた。参加者に役割を与えることで交流への意欲が高まり、参加者同士の中も深まったと考えられる。このことも影響し、今年は去年に比べて各プログラムの欠席者が少なかったと思われる。
- 今年は各都市で日中韓交流を行うことができた。また、交流日もそれぞれ 2 日間設けられたため、参加者は十分な時間の中で交流できた。
- 「東アジア文化交流プログラム 2019 “創造する奈良”」での、演劇ワークショップや詩のワークショップは、言語や文化が異なる人との様々なコミュニケーションのあり方や方法を学ぶものであった。日中韓参加者それぞれが自らを表現する内容は、単に親睦を深める交流企画のみならず、表現をテーマとするプログラムとしても成立したと考える。
- 「ならまち遊歩」との連携により、Nara 観光コンシェルジュ・まほろばソムリエの友松氏にご協力いただいたことで、奈良の参加者がより深い学びを得ることに繋がった。その学びを活かし、中韓の参加者たちに奈良の魅力を発信できたと考えられる。また、奈良の参加者によることばの作品「奈良-NARA- 私の心に刻まれた情景」を「ならまち遊歩」の蔵シアターで上映していただくことができた。
- 小野氏が総合プロデューサーを務める奈良町にぎわいの家でも、ことばの作品「奈良-NARA- 私の心に刻まれた情景」を上映していただいた。また、案内パンフレット（奈良町にぎわい通信）に、作品上映の様子を掲載いただくことができた。
- 講師の方々のご協力により、「奈良-NARA- 私の心に刻まれた情景」を多くの方に見ていただけたため、本プログラムに間接的に参加してくださる方の増加に繋がった。
- 中韓渡航プログラムにおいては、日韓関係の悪化の影響で参加者も交流・渡航に不安を抱えていたが、寧波市並びに済州特別自治道、それぞれの多大な協力のもと、安全に行程を終えることができ、参加者にとって満足度の高いものとなった。中国や韓国への渡航は難しくない時代だが、現地で同世代の人と親睦を深める機会は留学などの機会が

ない限り、多くないと考えられる。本プログラムは、海外への関心はあるが渡航経験がない、あるいは少ない人にとって参加しやすい内容であり、大変有意義なものだと考える。

<課題>

- 奈良での日中韓交流において、「ことば」による作品作りのグループワークを行ったが、運営側の意図があまり伝わっていないように感じられた。言葉の響きや音の違いなどを活用して作品を作るというワークに難しさがあったため、来年度以降のワークショップの内容を検討したい。
- 奈良での日中韓交流では、1日目に「古都としての奈良」をテーマにならまち夜のガイドツアーなどを行い、2日目は「言葉によるコミュニケーション」をテーマに作品作りを行った。奈良の伝統的な要素と、生活に関連するコミュニケーションの要素を取り入れた内容にしたが、参加者によっては「奈良らしさに欠ける」と感じているようであった。したがって、プログラム内容のテーマについて再度検討する必要があると考える。
- 6月～9月にかけてプログラムを行ったため、熱中症の危険性を考慮し、屋外での活動を制限しなければならなかった。また、台風のシーズンでもあり、台風によって寧波・濟州でのプログラム内容が大幅に変更された。現地の事務局とも協議を重ね、プログラムの開催時期を検討していきたい。

奈良市文化振興課

奈良市二条大路南一丁目 1-1

☎0742-34-4942 📠0742-34-4728

令和元年 10 月